

乳歯列期からの咬合誘導

毛利 元治（もうり小児歯科・福岡市）

最近、検診や臨床の場で見ると小児の咬合は乱れが著しく、乳歯列期でさえ正常な咬合を見る機会はむしろ稀になった。咬合誘導が主題である小児歯科は、「虫歯の洪水」の時代以上に大きなテーマを抱えたように思われる。

これまで、乳歯列期は形態的に安定して変形が少ないと言われてきた。このような早い時期から咬合を乱す原因は何だろうか。私の知る限り、この疑問を確実に解いてくれる資料は見あたらない。発達の一段階として観察を続けるだけでよいのかもしれない。しかし、乳歯列に習慣化された咬合位が固定して、将来、永久歯列の咬合異常へと発展していく可能性を消し去ることもできない。また、現在は咬合に問題がない症例であっても、嚥下癖などの機能異常を伴う場合は、将来に咬合異常へと発達する恐れもある。

一方、小児歯科を受診する主訴の大部分はウ蝕治療であり、咬合に対する患者側の意識は必ずしも高くはない。事実、保護者が患児の咬合異常に気付いていず、来院して始めて意識することが多い。また、歯並びについての知識も、情報を得た時期や入手先によって様々に異なっている。

さらに、咬合異常の種類や程度によって対応方法も異なり、しかも患児の年齢や協力度により選択できる手段も限定される。

以上のように術者側、保護者、患児のいずれにも問題を抱えております。しかし、医院に来院する小児は、乳幼児歯科と思われるような2～3才児が多く、早い時期から対応できる利点を生かした診療体系を模索しております。この中で、

- 1) 保護者へ咬合に関する情報を提供して、家庭と共同した予防手段を加えていく。
 - 2) 定期的な経過観察の中で、できるだけ小さな異常の段階で咬合を修正していく。
- の2点を主題に、臨床を続けております。その一端を症例を通して報告し、皆様のご意見を伺いたいと思います。